（『国語学』193集　1998・6・30）

語彙（史的研究）

山本真吾

一、はじめに

本展望に国語学史の一としての意義を認めて執筆することを目指すならば、平成八年・九年における当該分野の個々の研究業績について従来の研究の流れの中に定位させることをまず行い、その到達段階の現状に照らして内在する問題点を剔抉し、今後の課題を提示しつつ方向性を予想することが行われるべきであろう。その場合、まず本稿がいかなる視点に立ち、どのような方針に基づいて記述を行うかを予め示しておくことが必要となる。

この稿では、まず第一に研究の萌芽・新生・興隆といった展開面に注目し、ついで不易・相続の継承面を取り上げ、その双方を以て今期の研究段階を測定しようと思う。すなわち、前者は、今期の特色とでも称すべき研究の出現に焦点を当てるもので従来になかったような動的進展の観察を行うものであり、後者は、これまでの研究を着実に継続し集積する営為の確認を行うことで、当該分野の研究の深化・拡充の健全さの度合いを点検することを目的とする。

但し、結論的に言って、前者について、特にこの二年の動向に大きな変移があったものとは認められないので、実際には、以前からある程度行われはしていたが今期になってその興隆著しく、特に注目に値すると認めたケースを中心に取り上げることになろう。

筆者が収集し目を通した当該分野に関わる（その外延は明確にし得ないけれども）著書・論文の数は、平成八年―二〇四、平成九年―一六四の計三六八となり、量的に観る限り、今期もその生産能力はいささかも減じてはいないように見受けられる。その網羅的な著書・論文リストは『国語年鑑』が提供してくれ、これによって量的規模の測定がある程度は実現するであろうから、ここでは、それぞれの各項目においてトピックを端的に示す著述のみに限定して取り上げる。また、学界展望は、研究集会における口頭発表及びその質疑や講演も視野に入れるべきものとの判断から各項目において必要と認めた場合これらにも適宜触れることとする。

なお、慣行に従い、副題を省略したり、『国語語彙史の研究』を『彙研』、『鎌倉時代語研究』を『鎌研』、『日本語研究諸領域の視点』（明治書院、平8・10）を『視点』、『山口明穂教授還暦記念国語学論集』（明治書院、平8・6）を『山口』、『日本語の歴史地理構造』（明治書院、平9・7）を『歴地』などと略称することがある。また、古辞書の文献学的研究や音韻・文法的要素に関する研究等は本展望号の他分野で

扱われるであろうから、特に必要と認めたもの以外は、ここでは取り上げない。

二、展開の側面——萌芽・新生・興隆

まず最初に、今期注目される展開を示した研究を列挙するならば、一つに基礎語に関する研究、一つに文化、社会、生活に関わる言語文化史的観点に立つ語誌研究、そして語彙史研究と表記史、文体史、方言史等に跨がる分野横断的研究が挙げられよう。

二・一 基礎語（語彙）に関する研究

基礎語（語彙）[注1]に関する研究は、山内洋一郎「語史について」（『野飼ひの駒 語史論集』和泉書院、平8・5）が的確に指摘する如く、我々の言語の根幹を形づくり、使用頻度の極めて高い語群であってその重要性は誰しも認めるところであるが、実際に着手するとなると、「全般的に意味も限定的でなく、それ故に文脈や対象に応じて微妙に変化して、捕捉しがたく、真に分析を始めると、一資料・一共時態における記述にさえ多大の時間と思考が要ることが多い」として、永らく敬遠されてきた分野の一つであろう。

今期最も注目に値する業績として、この基礎語に関する研究書が刊行されたことがあり、また古代より現代に至るまで命脈を保っているという程度の意味で基礎語なる術語の使用が許されるならば、このような語に関する研究の中に優れた論文をいくつか認め得たということを掲げたい。

まず第一に、東辻保和『もの語彙こと語彙の国語史的研究』（汲古書院、平9・9）は、日本語の基本的認識に深く関わる「もの」と「こと」とを取り上げ、平安鎌倉時代の文学作品を主軸に、和化漢文、訓点資料、片仮名交り文へと文献資料を拡充しつつ、意味用法を通時的に解明しようとしたもので、多角的かつ綿密な、不断の思考と作業とを基盤に置く大作である。また、日野資純『古典解釈のための基礎語研究』（東宛社、平8・4）は、前著『基礎語研究序説』を承けて刊行されたもので、特に今昔物語集を資料として、ウヘとカミ、ウチとナカの語義の違いを分析しているところなど有益である。

渡辺実「難語「さすが」の共時態と通時態」（『上智大学国文学科紀要』14、平9・3）は、現代語「さすが」の用法を三つに整理した上で、これらの振舞を相互に関係づけて同じ「さすが」の分化した用法として位置づけ、また互いにすべてを統合し得る形で「さすが」の意義を記述するために、当該語を古代以来の文献資料に基づき通時的に観察する。論理構築と分析の手法に学ぶべき所が多い。上野辰義「「なさけ」の語義と性格」（仏教大『京都語文』1、平8・10）は、現代共通語とは異なる多義性を有する古語「なさけ」に注目し、最初に基本義を押さえた上で派生関係の説明を試み、この作業を通して平安文化を透視しようとする。大谷伊都子「四段活用の「かく」について——下二段活用の「かく」との比較をとおして——」（『国語学』189、平9・6）は、基礎語に相当するのはむしろ下二段活用の方であろうが、それとの比較で四段活用語に焦点を当てて意味用法を分析している。田中牧郎「惜シの意味記述——万葉集を資料として——」（『学苑』672、平8・1）や藤原浩史「平安和文における「ののしる」の意味構造」（『歴地』）は、共に特定の時代・資料を扱うものであるが、その行き届いた分析整理は現代まで存続する語の意味の通時的考察の基盤となり得よう。

この他、『一語の辞典』（三省堂、平8・2～平9・10）として「家」「気」「天」「風」「おんな」「神」等が刊行され（「気」は『日本語学』15-7、平

8・7でも特集された）、吉田比呂子『「カゲ」の語史的研究』（和泉書院、平9・5）も古代より用いられ続けた語を対象としており、ここに位置づけることができよう。

基礎語（語彙）の史的研究は、確かに根気と力量の要る仕事であるが、いつまでも後回しにしている限り、国語辞典の水準はこの点において停滞し続けるであろうし、当該分野の健全な発展も望めまい。今後も継続してゆくべき重要な課題であろう。近時は、文献資料の索引も多く刊行され、大量の言語情報もパソコン上で処理することが可能になってきた。かかる体制の整備・充実を睨み合わせながら、より効率的な方法が模索されてしかるべきであろうし、その時期に来ているとも言える。

二・二　言語文化史研究——脱領域的、学際的、語誌研究

国語学から越境して、文化や生活また社会の歴史的背景を加味する、言語文化史的観点からの語誌研究は、既に胎動していたが[注2]、国語学会平成七年度秋季大会公開講演会の前田富祺「食の言語文化史——物尽しと語彙体系——」に導かれ、また『国文学　解釈と教材の研究』41-11（平8・9）で「日本語の語彙と言語文化」が特集されて特別企画「言語文化のキーワード」が示されるに及んで、いよいよ隆盛を極めこの方面の研究の必要性が自覚されるようになったと思われる。これは独り国語学の研究のみにとどまらない脱領域的、広域的研究であり、文化、思想、社会、歴史学全般に亙る学際的研究である。ゆえに、それぞれの知の総合がこの研究の成立のための必要条件となる。

文化交流史、学術史の観点から、その語誌を考えたものに、荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播　地理学用語を中心に』（白帝社、平9・10）がまず注目される。地理学、科学史の知見の導入無しにはかかる研究は成立せず、妥協を許さない学問的良心に溢れる本書の刊行を慶びたい。沈国威「近代における漢字学術用語の生成と交流——医学用語編（1）・（2）——」（『文林』30・31、平8・3、平9・3）も、周到な調査と文化交流史的観点に基づく有益な論考である。訳語の問題も文化的背景が密接に絡む。この方面では、斎藤文俊「『解体新書』翻訳と漢文訓読」（名古屋大『情報文化研究』3、平8・3）、鈴木直枝「明治前期の学術書にみる翻訳態度」（東北大『国語学研究』35、平8・3）が注目される。

社会・政治史の観点からは、今期も「国語」なる語に関する議論が盛んであった。京極興一『「国語」とは何か』（東宛社、平8・2）が改訂新版となり、近代日本の言語政策史・伝記的考証を丹念に踏まえた上で「国語」なる思想の内実を的確な言葉で言いあてるイ・ヨンスク『「国語」という思想　近代日本の言語認識』（岩波書店、平8・12）や安田敏朗『植民地のなかの「国語学」』（三元社、平9・4）等が公にされた。いずれも当時の政治・思想の実情と深い関わりのあることは言うまでもない。また、池田幸恵「「顚倒」小考」（『国語文字史の研究』3、平8・6）は、当該語における「他者の所領を押し取る」意味の出現を院政末期の古文書に認め、当代の土地制度に関わる社会経済状況との絡みで解釈する論で、日本史学者によるかつての『ことばの文化史』シリーズ（平凡社、昭63～平1）に繋がる興味深い論考である。

性、特に女性史の問題は、仏教史や思想史、文学史研究において近時とみに盛んになったが、国語史においても遠藤織枝『女のことばの文化史』（学陽書房、平9・5）がその萌芽として注目される。こ

れに関して、杉本つとむ『女とことば今昔』（雄山閣、平9・5）、大石初太郎「女性語の変遷」（『文教大学国文』25、平8・3）もあった。その本格化が女性史研究と相互補完的に行われることを望む。

宗教史との関わりからは、仏教語を問題とする片岡了「仏教語の一般語彙化――阿吽と阿伽陀の例――」（大谷大『文芸論叢』46、平8・3）が経典・仏教学の豊かな知識を背景に論を展開している。『国文学解釈と教材の研究』41-8（平8・7）が「仏教・知と言葉と」のテーマを掲げ参考になる。キリスト教に関するものとして、米井力也「キリシタンの聖書――「微税人」の翻訳をめぐって――」（『日本文学』45-7、平8・7）が訳語の問題を取り上げる。

文学・芸術の視点からの研究は、かねてより文学・語学及び歴史学の総合を自覚している上代語研究をはじめ従来から少なくないが、今期も味わい深いものが目についた。作品に対する深い理解と鋭利な鑑賞力をもって切り込む卓論をいくつか紹介したい。

芸能関係では、まず浄瑠璃について「踏む」「蹴る」等の語に注目して近松の手法を解明しようと試みる深澤昌夫「足もとから見る〈近松の世界〉」（『宮城学院女子大学研究論文集』83・84、平8・6、12）がある。未だ統計処理に止まっている段階だが視点が面白く今後に期待したい。また、鷺流狂言から問題提示を行う山口仲美「モモンガの声――擬声語に関する一考察――」（『山口』）も魅力的である。文学作品に関係するものでは、伊井春樹「保坂本源氏物語の表現――「けはひ」と「けしき」――」（大阪大『詞林』20、平8・10）、遠藤邦基「禁忌詞と読癖――「世人（よひと）」の改読の方法――」（『彙研』16、平8・10）は源氏物語本文の問題にも関わり興味深い。また平安時代語資料として扱うに不安の多かったうつほ物語についての、本文研究に根ざした室城秀之「『うつほ物語』語彙雑考（五）」（『国文白百合』28、平9・3）が丁寧な仕事で有益である。小林祥次郎『季語遡源』（勉誠社、平9・6）は歳時記に登載の季語の古典文学における用法を明らかにする。このように古典文学の作品中のことばを見渡したものとしては、川村晃生「「朧月」の成立」（『国語と国文学』74-10、平9・10）があり、歌詠みびとの朧月への開眼と好尚の様相を分析しこのことばの文学的成立について主として新古今集時代までを対象として論じている。岩下均「「鈴虫」考」（『目白学園国語国文学』5、平8・3）は古典の鈴虫を松虫や蟋蟀なども含めて特定しようとする。同じく柳澤良一「きりぎりす考――虫の文学史の試み――」（『国語と国文学』74-11、平9・11）も副題に示す如く「きりぎりす」の文学的生態に迫る。さらに、「花の古典文学誌」（『国文学　解釈と教材の研究』42-5、平9・4）はトピックが豊富で参考になる。

また、稲田利徳「「しぶく」考――辞典類の用例の検討から――」（『国語国文』66-1、平9・1）、浅見徹「ひとり寝の歌」（『彙研』16）、山口仲美「ツクツクボウシの鳴く声は」（同）も文学作品に対する造詣が窺え味わい深い。枕浦勝「「力なき・力およばず」について――伏見宮貞成の思想性――」（『彙研』15、平8・5）は、漢文日記の文学性が国文学研究の側から追究されるようになることと相俟って注意される。位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清水堂出版、平3・2）が既に貞成の生きかたを「無力」を軸に鋭く切り込んで詳細に論じており、これと連絡する内容である。

国語学・国文学の術語に関する語誌研究も一群をなす。深い洞察をもって精緻な論を展開する釘貫亨「日本語学史における「音韻」の問題」（『名古屋大学文学部研究論集・文学』43、平成9・3）をはじめ

として、工藤力男「語源俗解考」（『成城国文学論集』25、平9・3）、菊地圭介「「おくりがな」「すてがな」の語史」（日大『語文』94、平8・3）、清水史「古代等韻学とその術語について」（『語源探求』5、平9・7）、また、能の演出用語を詳細に考察する山中玲子「クツロギ考」（『山口』）、磯貝和代「連歌論における「切字」について」（『中京国文学』15、平8・3）、諏訪春雄「近世文学の術語」（『国語と国文学』73-11、平8・11）等がある。国語学・国文学界におけるさまざまな術語の錯綜している実状に炙りだされてのことであろうか、自らの研究対象そのものの術語の履歴書を確認する作業と映る。

かかる語誌研究は、文化史学・歴史学等の関連する諸学の協力なくしては成立し得ないものであるが、逆に語誌研究が諸学に貢献する知見を提供することも期待されるし、大型国語辞書の充実等にも寄与する所大であろう。ただ、この研究の難しさは、参照すべき他領域の研究成果をどうやって知り、活用するかにあろう。国語学の論文において論証の確かさという点に絞ってもその水準がさまざまであるという事情は、当然他領域の研究論文についても当て嵌まる可能性がある。しかしながら、これらに批判を加えるには、咀嚼するだけでも困難が予想される他領域の論文だけに相当に見識が必要であろう。依拠論文にもし事実の誤りを含む場合、それに立脚する研究にとっては土台を揺るがす致命傷にもなりかねないこと応用学の宿命であり、かかる危険性は十分認識しておかねばなるまい。

二・三　分野横断的研究——語彙史と表記史等

今期のもう一つ注意しておきたい傾向は、国語学研究の内にとどまるものではあるが、表記史、文体史など他の分野にも跨がる研究が多く見られるようになったということがある。それは、当該分野の指導的役割を果たしている、今期の国語語彙史研究会、語彙・辞書研究会等の発表題目を通覧しても窺えるように思う。語史の研究要素として、語形や構文が問題となる以上、音韻史や文法史に関わることは当然であるが、特に、表記史、文体史、方言史に亙るものの多く目についたことは指摘しておきたい。

まず、表記史に関わるものとして、枚浦勝「「押」から「横」へと「妨」から「暴」へ——「横柄」「横領」「横暴」への用字変化——」（『国語文字史の研究』3）、田野村千寿子「「栖」から「住家」へ——表記変化とその背景——」（『彙研』16）は、用字変化と意味変化の相関性を問題としていて興味深く今後その進展が期待される。和田潔「漢語の形成についての一考察——「じょうだん」考——」（『成城国文学』12、平8・3）も、方法論の上で表記の通時的考察が語史研究に寄与することを説く。小椋秀樹「明治期の女子書簡文における「参らせ候」の衰退」（大阪大『語文』67、平9・2）は、明治期女子用往来物において「参らせ候」が衰退した要因を印刷書体の問題と絡めて推論を下し示唆に富む。

この他にも今期は表記史と語史との関連の認められるものが多く目に付いたが、これは近時の文字史・表記史研究の高まりと連動するものと解釈される。

文体史に関わるものとして、中川正美「「うし」表現の諸相——文体論の観点から——」（『彙研』16）は文学で必要なのは語の有無ではなく、語の用法（語に込められたニュアンス、語に内包された文化や歴史）であると説き、その実践例を展開する。山本真吾「平救阿闍梨作の諷誦文類について——十一世紀前半期の漢字仮名交り文資料として——」（『訓点語と訓点資料』98、平8・9）は、標題文献について、いわゆる和文語・訓読語の混在を調査し、十一世紀前半期の漢字仮名交り文における和

漢混淆〉の状況を観察したものである。青木毅「『今昔物語集』の文体の一側面――機能動詞「ナス」の分布が示唆するもの――」（『訓点語と訓点資料』99、平9・3）は、今昔文体を測定するものさしとして機能動詞「ナス」に注目し、そこに漢文翻訳文の影響を見ようとするもので丹念な文献調査と慎重な論旨展開に好感が持たれる。遠藤好英「近代における漢語の文章史的性格序説――「命名」の明治期の例をめぐって――」（宮城学院女子大『日本文学ノート』31、平8・1）は、近代になって登場する漢語「命名」がいかめしい語感を伴うことを踏まえ、文語文にふさわしい語となることを当時の歴史的背景にも目配りしつつ広い視野から論じる。

方言との関わりについて、金水敏「日本語の存在表現の地理的分布と歴史的解釈」（神戸大『文化学年報』15、平8・3）、安部清哉「〈禿頭〉の語史と方言分布――上方出自語同士が江戸語・上方語の対立を成す背景――」（『彙研』15）、金沢裕之「明治期大阪語の可能表現」（同）がそれぞれ独自の手法を展開させ、有意義な成果を積み重ねている。佐藤貴裕「江戸の鱗」（『言語学林1995―1996』、平8・4）も、近世の江戸に限定して鱗の語形について詳細な検討を加えるが、「現在、文献国語史学と言語地理学との対照研究が多くの語に及ぼされるようになってきた。が、確実な対照のためには、双方の領域においてより誤差の少なくなるような工夫、たとえば、現代から徐々にさかのぼることなどを考えなければならない段階にきているようにも思われる」と結び、近世文献の活用を訴える所は傾聴に値する。

三、継承の側面――木易・相続

ここに該当する著書・論文は枚挙に遑がないであろう。本稿では取り上げる基準（目安）として、次のようなことを考えた。それは、一回的、散発的でない、その研究者が当該領域の研究の深化・拡充の必要を自覚し根気よく継続していると認められるものであり、また、切り口（着眼点）に独創性が認められるもの――料理に例えて言うならば、いかなる食材（取り上げる語、語彙）を用いて、どんな包丁さばきをし調理を行うか（方法、論証）、その際にはその食材の存在する環境（資料の性格）を熟知することも必要であろう、そのそれぞれにまたその統合の妙に独創性を評価したい――である。

三・一　特定の位相・語種・意味分野

位相語については古辞書を通して測定しようとするものが目立ち、不破浩子・遠藤邦基「『和名抄』『飲食部』の語彙の位相――漢字文献と和文献との比較から――」（『彙研』15）、萩原義雄「『異名』について――『下学集』の異名語彙をもとに――」（『駒沢大学北海道教養部研究紀要』31、平8・3）、同「唐名攷――読み方と室町時代古辞書の収載形態について」（同32、平9・3）と魅力ある高水準の論考があった。宮澤俊雅「やまとなにいひにくきこと――規子内親王前栽歌合の判詞をめぐって――」（北大『国語国文研究』106、平9・7）も「やまとな」の概念を和名抄を通して厳密に規定した上で、当該歌合の正確な解釈に到達している。訓点語は、築島裕「訓点語彙編纂の構想」（『中央大学文学部紀要（文学科）』77、平8・3）、同「訓点語彙の歴史的変遷の一側面――「アナヅル」「ミダレガハシ」「ウックシム」「ノムド」など――」（『文学・語学』154、平9・3）と質・量両面において当該資料群の扱いに熟達した研究者の論考が出され、学ぶべき点が多い。

漢語に関する研究も着実に進められている。小島憲之（平10・2・11逝去）「『佩文韻府』を讀まぬ日はなし――漢語表現の問題をめぐって――」

（『萬葉』157、平8・3）は、中国古典の該博な知識を背景に安易に和製漢語と言うべからずとの教えを説き続けた著者の方法論を具体例に基づき提示したもの、室町期文献の扱いに精通した大塚光信「似（えせ）漢語――沈思と笑止と――」（『国語と国文学』74-10、平9・10）とともに当該分野の深い識見に貴重な教示を得る。竹浪聰「源氏物語における「子細」」（『国語学研究』35、平8・3）は古注釈等に基づく源氏解釈史を踏まえている点興味深い。平安・鎌倉時代の漢語について、原卓志「「全分」の意味・用法について」（『鎌研』19、平8・8）・同「漢語「悉皆」の系譜」（同20、平9・5）は漢語副詞の問題を中心に粘り強く漢文文献に沈潜し着実な成果を積み重ねる。栄竹民「漢語の意味変化について――「料理」を中心に――」（『訓点語と訓点資料』100、平9・9）は中国・日本の文献を渉猟し漢語の意味変化の類型を見ようとする労作である。「料理」は食生活史とも関わり、近世以降の文献の精査も課題となろう。後藤英次「『吾妻鏡』における和製漢語」（『歴地』）も「芳」「叡」を軸字とする敬語に関する和製漢語を問題にしている。近代語についても見るべきものが多いが、中でも浅野敏彦「新島襄の書簡にみえる漢語」（『大阪成蹊女子短大研究紀要』33、平8・3）、田島優「『新説八十日間世界一周』における字順の相反する二字漢語」（『東海学園国語国文』50、平8・11）、新野直哉「〝全然〟＋肯定」について」（『国語論究6　近代語の研究』明治書院、平9・7）等に、問題意識の独自性が看取される。和製漢語の成り立ちから分類試案を提示する陳力衛「和製漢語分類の試み」（『目白学園国語国文学』5、平8・3）は、その構想を示した意欲作である。ただ惜しむらくは従来の和製漢語の術語規定と認定のあいまいさを批判するところからの立論には少なくとも二つ問題を感ずる。その一つは、批判の対象となっている論考はいずれも〝昭和〟の頃の産物であって、前掲の小島憲之はじめ、浅野敏彦（次号の展望に属するが『国語史のなかの漢語』和泉書院、平10・2の「Ⅵ和製の漢語」参照）、田島優、堀畑正臣、沈国威らの諸氏の近年の堅実な仕事を見る限り、もう少し健全な進展を見せていると現状把握すべきではないだろうか。いま一つは、術語規定の不明確さを指摘する一方でいかようにも理解可能な「和習」なる術語を使用して和製漢語を規定する所も不用意の感が否めない。このような点に言及しやや固執するのは、今回、担当分野の論文を読む作業を通して、先行研究の紹介が近ごろ多少儀礼的に傾いているのではないかとの危惧を抱いたからである。確かに触れてはあるが研究段階を正確に認識していない論文も少なからずあるように読解された。研究が盛んになれば勢い論文の数も増えるわけで多読と精読の作業には多大な時間と労力を伴うことからこれを煩瑣に感じる向きもあろうが、学問的良識の問われる所でもある。自戒としたい。

外来語に関しては米川明彦「死語化した近代の外来語――慣用句と間投詞の場合――」（前出『近代語の研究』）の視点が面白い。

助数詞については、三保忠夫「平城宮長屋王邸宅跡出土木簡における助数詞について」（島根大『国語教育論叢』7、平9・9）、諸星美智直「「疋（匹）」と「頭」――牛馬豚羊の助数詞――」（『視点』）など丹念な調査研究が認められた。

特定の意味分野では、服飾語彙に注目する、岡田芳恵「『宇津保物語』の服飾語彙について」（『東京女子大学日本文学』86、平8・9）が、分類項目を整備した詳細な報告であり、また、舘谷笑子「「紅之深染・薄染」――色の濃淡を表す形容詞の考察から――」（『萬葉』160、平9・3）も説得

力に富む。

三・二　特定の時代・資料

安部清哉「語彙・語法史から見る資料――『篁物語』の成立時期をめぐりて――」（『国語学』184、平8・3）は、語彙史研究を応用して作品の資料性を考えようとする意欲作であり影響力の大きさを予感させる。古田恵美子「『往生要集』仮名書き本の語彙」（『山口』）は、作業上、種々の困難が予想される仏典仮名書き本諸本相互の語彙比較であるが、調査手順に手際良さを感ずる。

古代語については、山口佳紀「万葉集「妹なね」と上代語ナネ（汝兄）の用法」（『彙研』16）、吉野政治「アママ（雨間）考」（『萬葉』159、平8・9）、同「古事記アマヒ考」（同161、平9・5）、中世語では、酒井憲二「実語教童子教の語彙」（『国語国文』65-9、平8・9）、同「中世末同義語一班」（日大『語文』94、平8・3）、小林賢次「「真っ赤な嘘」考――マッカナ・マッカイナ・マッカイサマナー――」（都立大『人文学報』282、平9・3）、近世語では村上雅孝「近世語としての徂徠用語」（東北大『文化』60-1・2、平8・9）に、着眼点や論証方法に学ぶ所が大であった。

三・三　語形・語源・語構成・接辞

語形の問題に関して、特に、今野真二「ひひらき考」（『国語国文』66-7、平9・7）、橋本博幸「中古・中世における副詞ヤヲラ・ヤワラをめぐって」（『歴地』）が、用例の吟味・解釈の点で興味深く感ぜられた。

語源については前田富祺「国語語彙史における語源研究――〝くちばせ〟をめぐって――」（『彙研』16）があり、語源研究についても言語文化史的観点の必要性を説く。乾善彦「「山下風」小考」（『萬葉』156、平8・1）も語源意識の問題に言及する。この他、『語源探求』5（前掲）にも吉田金彦「万葉「多奈和丹」考」以下有益な論が並ぶ。

語構成は、蜂矢真郷「語構成と形状言」（大阪大『語文』65、平8・2）、同「複合形状言・派生形状言」（『彙研』16）等の一連の研究が注目され、用例検討に関する判断の妥当性と問題提示の明確さ、発展性に教示を得るところ多く、その集大成が待たれる。

これに関連して、今期は接辞関係の論文に完成度の高いものが多く認められたことを指摘したい。接頭辞ウチを問題にする近藤明「中古における「ウチ＋他動詞」の意味――源氏物語の場合――」（『歴地』）、カス型動詞の派生現象の本質に迫る青木博史「カス型動詞の派生」（『国語学』188、平9・3）、タシに着目する舘谷笑子「接尾語タシの成立過程」（大阪大『語文』69、平9・11）、馬琴に用例の多いナフ型動詞に注目する漆谷広樹「接尾辞「なふ」の性格」（『国語学研究』35、平8・3）と有益な論が目立った。さらに、小野正弘「「風情」の語史――接辞化と中立的意味のマイナス化――」（『国文鶴見』32、平9・12）は、中立的意味からプラス・マイナスの意味へと変化することばについてトータルに見据えようとする視野の広さや論述のバランスの優れた点等注目に値する好論である。

三・四　語史・語彙史の理論

以上のように、今期は語史研究にまことに豊かな成果が認められた。珠玉の名品を収録する山内洋一郎『野飼ひの駒　語史論集』（先掲）の方法論と実践例にも導かれ、その視野を拡大しつつ今後も益々隆盛を見ることとなろう。

これに比して、語の集合として語彙を捉え通時的に考察する研究は、必ずしも多いとは言えない。以前に比べて短期間のうちに一定

の業績を要求することの多くなった昨今の環境が、研究者の気力を萎えさせてしまうのであろうか。藤原鎮男・立川美彦「連歌の語彙にみる普遍性と個別性」（『国文学研究資料館紀要』22、平8・3）、神谷かをる「古今集の語彙」（『光華日本文学』4、平8・8他）等が目に付いた程度である。その中にあって田島毓堂「語彙研究の可能性」（名古屋大『語彙研究法』報告2、平9・8）は自身の比較語彙研究の方法・対象についてその基盤の整備を精力的に行う。学界に蔓延る「語彙」なる術語の乱用の停止を訴える箇所は、本稿二・二の術語の語誌研究とも密接に関わる。この理論についての有効性の検証を、限部功「古典作品の分析のためのC50、D10と異なり語数について」（大阪樟蔭女子大『日本語研究センター報告』4、平9・3）は指標数値の妥当性について行う。また広瀬英史は「比較語彙論的方法による語彙史研究の試み」（『名古屋大学国語国文学』80、平9・7）で源氏物語（桐壺巻）の原文と現代語訳との語彙比較を行うなどしてこの研究を推進している。今後は、たとえば、異なり単位の有意差といった客観的な〈数値〉を「詳細で適切な」また「豊かな」表現といった主観を伴う〈解釈〉へと読み替えることの論理的可否の検討、また当該文学作品の研究者にとっては時に〈常識〉とも映る、この手法によって得られた作品理解・解釈の水準をいかに超克するかの問題は、膨大な作業量を必要とするかかる研究について、性急に過ぎるかとも思われるがなお期待したい所である。

四、おわりに

以上、語・語彙の史的研究に関する著書・論文等に基づき今期の展望を試みた。冒頭に述べたような方針は読み返してみると甚だ羊頭狗肉であったことに気付き、今更ながら汗顔の至りである。立てた項目や著述の取り上げ方にも不適切な部分が存しよう。また、全体の傾向を重点的にみることを優先したために、ここに題名を掲げることのできた業績は全体の四分の一程度にすぎず、重要かつ優れた論考で示すことのできなかったものも多い。御寛恕を乞う次第である。このように甚だ稚拙な内容となってしまったが、私自身にとってはたいへん良い勉強になった。貴重な機会を編集委員会から賜ったことに感謝したい。

注1　林四郎「語彙調査と基本語彙」（『電子計算機による国語研究Ⅲ』国研報告39、昭46）
　真田信治「基本語彙・基礎語彙」（『岩波講座日本語9　語彙と意味』岩波書店、昭52・6）
　徳川宗賢「日本語基盤語彙への接近」（大野晋先生古稀記念論文集『日本研究――言語と伝承――』角川書店、平元・12）
注2　前田富祺「文化としての語彙」（『彙研』10、平元・12）
　網野善彦他『ことばの文化史』（平凡社、昭63・11～平元・8）
　安部清哉「展望・語彙（史的研究）」（『国語学』161、平2・6）

附記
文献の収集・閲覧にあたって多くの方々のお世話になったが、特に国立国語研究所の井上文子・新野直哉の両氏、西山短期大学の余田弘実氏には多大のご助力を賜った。記して深謝申し上げる。

――三重大学人文学部助教授――